駿臺雜話

四

駿臺雜話卷四目錄

智集

燒香とやくとの違ひ
法とほうのこと
作者の苦
源氏の美
茶湯は公家
足利家は武
無法の大事
無法の法
運慶の口傳
鳴鶴の物
青八瓶の續松
大佛の鑄
楠正成
武田信繁
孫臏韓信の兵法
不忘向君

昭和二十一年九月十五日

原

大敵かたし

後素雜話卷四

徒然草に曰く晴れ

三伏の夏もさすがに木蔭はすごしやすく入くすぐるまで涼しく積雪新なる春て夕日猶のの蔦ばかりうちひらめくもおもしろし池の芙蓉風にふかれてなびくもなつかしく竹樹露すがしくとかく思ひすごしぬべき折ふしなり秋は月の明かるきを朗詠し句欄によりかかりて詩ども思ひ出でられぬべきやうにおもひ出でられぬべし

えもいはぬ草の上に暮ゆけばやがて肉に入る心地すと蘇子瞻やいふらんとおもひ出でられぬべし宵の内過ぎて月の出でたるもおもしろし

てい物語に和泉式部なくなりぬと聞きてあはれがりて

燭をとくとおもへるよ、角燈をおもてに世俗の燈と燒臺とを燈燭臺をさし
て、世俗の燈と燒臺とを燈燭臺といふやうのまことにあ
やまりいふもあれども、是は燈とあまた、なるべ
中ひとつにいれたる世よりまれにあるまれなるを
を其ことをきけば却て分明なるぬやうにまよわるやうなる
しかるに我邦の長崎をよろこびて西子を
在邇而求諸遠といふ中も多くたゞ人をたゞ
と高きに求めたるに近きを求るを常の事
なるに光を射る若其的のごとき志をもて
まをもちゆるあるとへ多きに燈燭臺のごとくに賞する多や

屋くも同じくこれ侯ちの雅んこと。亦如此なる風てさるべ
きなり。羅大經の鶴林玉露に悟道といふ尼の作なりて
畫日尋春不見春芒鞵踏遍隴頭雲。歸來笑撚梅花嗅。
春在枝頭已十分。
そもそのちの貴ことをきく求る多くなること。ものこと山
野に春を尋るごとして。春をそこなはつくるの宿の梅をおれまをもて
まやくいたるも燒臺をやくとよりかたりていい
ちぐおと考ふるに又如此。道理さもこそ陽ち
はかのまやまおれたりたやくは東晋の時。桓温三秦に
打入りて函谷関を破り。三秦は豪傑なりふそくい

中さて一人も又〳〵なりと申て同じ中さて。植温の眼のくらむ者も
有をなりこの秦の豪傑を猛よるものやわれるなき。眼あ
る豪傑わけをもらしたして。豪傑を同じ
忱基とやくくしきやくいたれば。又和とやとよるを倭漢共よ。
英雄遠略とはいとも。甚威望をもて敵国に及ぶこと
ちく蕭牆のうちよ敵あれ幸をもらされも。忱基とやく晴
きよりあるとしあるを。代日本中くいたる。織田信長関東関西の
諸国をとりのこし。秀吉とうつりまつりしかよくしし
て。明智よこ後さまう。忱基とやくくしきよわうつとやとよる
と。勢さしてすぐく沈没の後と義況のうちやくいたる

中さう〳〵拙中くいたれ。名をひとり義をたくさまう
中くとやとやとあるまう。笑くいたる。組名の中さう無く
いたれ。忱基とやく晴〳〵とあるまくいたるとよ
くいたれ。前と又此旗をの後〳〵きよりあるとして。
又一種の屋形もあるへさ。韓退之の旗繫の旗よ。長繫八尺
空自長。旗繫二尺便且光中。旗繫の旗よ。長き八幅の
とやくくしたる。旗きと幅のとやくわり。巻中よ書をのこ字を
写るとやの事中とやとやとやと

のちにきを照らぬるまを雖うくしまつく網人廣生さい
ゐして照らゆるやうにやうに見えるをわうくしてを遠
きをてしに待ちまをきをてくしまを必ちやくくしきをものを
考ふるに前注の法の関尹子を見ればよ吾道八處勝
ことにより明中のまを區畫すやくいつて関尹子中を関令尹
喜の書なるを尹喜を老子の弟子なるを道德五千言も
此人の為なるをせれとも今世に伝る関尹子書八大うく
後人の作なるを尹喜を名を仮りて為なるもあるべし
さまをく老子に通ずるを處勝を字をすれとやく伝
但老子に通ずるを限らくうにれ吾儒中も備要とする事し

為くハワにあくくうくうくよりわうくを人を
ハわうくるまのくうくをうくを人をいるのをくを
ておうくをうくうくうくをを人をくくをくうくるまを一四月人ねる
そうにさまを人をくうくをうくをにおうくをうくをにを
くををうくをを考をくくうくを人をくくをくうくをにを已に智を為
ハ其明悠長寛大をくを自為を遠きをおうくををを真
の明をいを人をを已に材智をうくを聰明ををして為を
をををおうくををくをくをくをくをくをくをくを人をくを
し其明清通旋急をくをきをを及をさるのをくをくを為を
をおくのをを人をくくを下をを人の碁をくを人のをくを事を人

つんさく行よ。毎くそ非をわやまる事も多くて。ふてぶてしく。驕人易よわ。明入地中明夷君子以莅衆用晦而明の法。古の聖王晃旅月を蔽ひ。聰繊耳を塞くも。聰明此刃をやきをさらまく。脇そ然ともひて表りんとなる。古よ倭漢ともよ大智遠識の人。己の材智よ傲く。好く自ら用らをきく。老子の衰貴深藏若虛。君子盛德若愚と云ふ。もをまよさらまをせにこちの表て。故板倉周防守京所に留る。時。所司をそのまてよ。己の材智のそれをきて。彩色此よ。よ貴なる氣をもてよ氣奪て。彼もそまよ氣奪て。造の辭を審らせず。雙方の情を盡さる事わしんさく必障

晃旅 玉き貫きたる冠つたれ
蔽繊 みみをふさぐ
はやきり 意不明は やまいか

子をなるとて。まをまけるとまをかとして。多くの人たちらぬやうにまをまをまをまをまをまを。ハいたずらなるなるなる。おのけるなる。聖人のんもかまをまを。曲直理をまを。聽斷神よ毎。人く畏服せるなる。いと中人用脇而明なるなるなるなる。今よるなる世の俊者佞人。編して實とまを事。枚挙なるなるなる。中ものを最感。おまをふ事わを。同場なるなる時。事此家を無まを。まを家よ幼少の子出くなるなる。わを同場こやい無まを。まを同場なる馬とまを。風をうやまを。我子者といふ。此所代官とまをくまをくまを。京中村周よ住する者男女老弱をいふ。

とかゝ[illegible]ていふるわ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ

此あるひとりをさとしおろかなる人道を開発して用ゆ
べきこのかなめのいとし。とし頼してこれをおのれをまた
其用ゆるとをしてやうわれ小人の道を開発して用ゆる
物なのおとし。此理を去りて。明のかなめを必ずとなく
くらくすまいりんかやく。焼毒をかくしといかもあつ
むるし。但此統の四をもを各のいたるとをいたるを
片端く一統をこれ治へうし。さくも根もなきをかしあるう
ちなし。我金議をもつて。義微妙をなれば法あるの世なれ
ずまもいなのみれば法をもつてまもるべし。
各感しあるべし。

運教の仏偽

さてく義いひしかれば月を墜をなれば厨をもつて
稽よ子路持法の道を孔子に問なれば聰明睿智をもつて以愚
やかのあるをもつて。義のおこ以明を弱くまもるも聰明を十分に
おもきしやかやすく物やく十分をもつくまもるやう
をすれば七八分あるをもつておもをもうしてまもるをもつ
ふのくをもつて一端をもつてまもるをもつて
仏師運教をもつて仏法をもつて統しいを仏を仏教をもつて聖人
大きをもすくしをもつて耳聚をもつて仏を耳聚をもつて先
はれば大きをもつてもかをもつて民を用をもつて先をもつてすべし。

[illegible]

[illegible]

[illegible]

すべて本末を行なうことあり。其りそうねとこれあり。
て人のうたうる事のようけいとも、なれ行くもの
けうとき事なり。始皇法令を厳にして、禁止
せ、すべてこれより、うさんのこれあり。
事く騒動事多きそう。易は王用三駆失前禽と云
天子の猟を不合圍とく。網の三面をはり一面を禽
のこのきこうち殺はなきと。其ようく改事のあるやうく。
分程なくして二分を殺すよりあるとくしたがひ。
彼有不穫稈。此有不斂穧。彼有遺秉。此有滞穂。伊寡婦
之利。是田畝の事なり。周時より寛政あるとて遺利あ

ることをもとくし。又十分よりあるさんしく。其禽を失ふのみ
新嘗て歴史を考るに。漢の文帝より。帝を仁恕なりて
最篤なる事なり。然れども二君ともに寛大なりて。政事く
かなりなれども。治あらぬ事なりて。天下穏なりて。おろ
かなる安うなる。文帝の後武帝より。張湯桑
弘羊等をもちいて。威怒を十分よきはなれ。貨利を一毫も遺
さるもの。生靈荼毒し。民心離散て。漢家の危亡殆累
卵のごとし。仁宣の後仲宣あり。主安石名恵御覧用
て。新法を造て。功利を趨る。是より朝野騒擾し。民心疲困
宋朝の衰なる。鑑誡し。二君なる英明のうるわし

こゝにしてこゝろあるひとゝなり多く材力ありて就然たるあり
さんやうにて。おなじの道よりこの驅の法をもちゐること。
宋史は史臣仁宗を贊して、はく。
四十二年之間吏治若偷惰而任事茂刻之人刑法似
縱弛而大獄多平允之士國未嘗無強倖而不足以累治
世之體朝未嘗無小人而不足以勝君子之氣君臣上
下惻怛之心忠厚之政所以培植國基者厚矣
此贊よりこゝに仁宗朝を推論してその政をあきらかにとゝ
ろ。仁宗時君臣ともに聰明とはいへども。寛容をあるこ
とを多くして。驅の法を貴ばざりしなり。

法を江河のごとくしてこゝろ
ゆるさざる古人と人君を貴明不貴あるとこゝろ。明とあるとハ
ゆく般事に明にして姦を照らすこゝろ。其事あるく
其事あるく殘ゆるまでに。世中をあるゝ。姦を伏姦をして
姦を照らすこゝろ。こゝろあるこゝろ。
こゝろ。こゝろ姦を照らすこゝろ。
姦を照らすこゝろ。こゝろ。
姦を照らすこゝろ。天下の法を寛大
にして江河のごとくなるこゝろ。
法江河のごとくなるこゝろ。
こゝろ。こゝろ。

去りけまいのみ民ちっし狭くして牧し牧しさ法をよりて苦よりて江河を踏わやをとてくるものわれをきっ民溝渠をもうもすもハはよりるものちっし民ちとちっ後漢の郎顗っ安帝よりたる書よりを老のはもを江河のおちっ易避して牧牧と云っ古今不易の名言といっもしさもやちっわ弁くちっ一向に寛大なる世ようやすれといっもわっ民もも科條と繁しして法令煩苛なるを悪むといっすこしわっ寛大なるをよしとすと時よりて本末ありてもを厳急なるを貴ぶ事なり大ちっ泰平の世を民俗怠情に流れ驕奢を好て

故っ今元を治るよりっ寛大をやるよりっ勇易をもちいっ舊弊除っ去きやっ必改革を革め法令を厳にして民の耳目を新にすもし怠りて民を可無楽成不可無謀始やっ民をおろかにして国家の利病をもっ民の利害をのっ出やするなり其始やを己の獨を思わっ衆を無っ衆論もまちっなるあって云っ古よりっ賢の人をもっ拘らしして其功を成しわ畢竟天下の利となるかをの中を上下安堵をっ為ともにおるものの心を服させ時を賢ものの明なるに古へ孔子小智於衆人孔子

きすかをらんとす。鄧の子騭、鄧閶の政を改めて、舊俗の弊を除く。車服の驕を禁ず。田廬を制して、しもべ、富人を抑へ、貧民を恤む。獨り、兄の邑、數百頃を有して、鄧伍と、爭ふ。騭、取りて、鄧伍に與へ、自ら、遠に、我有子、弟子、産殖之、子、產而死、雖甚嗣之、とて、ひとり、ひとり、子、產を、惠人なるかの如し。甚、政、民を、苦しむ。

すれども、なほ、なほ、寛を貴ぶ。和、猶、寛、猶、以濟、寛政、叔、寛、以、過、甚、政、民、寛、罷、弱、而、民、猶、死、多、猶、死、之、以、猶、是、以、和、孔子、之、所、以、偏、中、之、政、也。

鴲鶏の事

ある人国衆の事聞て、大なる民戸八百ばかりすんで、
あるくうちに、高野よりとて、ひのさかりなるに、
しとゞ道のぬかるみ、くまぬ道もなし。雲霧世界を隔て、新雪仕
れり。あるに、一足踏みも能やらで、雪にくたびれ、
ゆきのこなるに、雪用をせずして、居うちに、小雨
わかくやうにさるまゝに、ぬれてゐるほど
なくなるゆゑ、程なくやうやうもちひなるゆゑ、
うち寄りて、ぬれ人鴲鶏を畜てゐるを、四方にて
あるを捕りて、同じく殺さんとすれば、友なるものゆゑ、
とかくするに、雪はゆゑ暑くなりぬ。雪はゆゑ暑くなりぬ。
雪はゆゑ暑くなりぬ。雪はゆゑ暑くなりぬ。
文字かと、あるいは、雪はゆゑ暑くなりぬ。
ちとゝゝとゝとゝと

こゝを肥富とゝなりてもとより
又でなるゝなんゝて遠もうまれ
別ぬ人のわれまゝ心のまゝ
よまよゝ肥富わるゝ
車ゆゝ
仕わ
ハちゝ
世ゝ
とし
ゝ二ゝ

と云ゝ車の動きなのゝ世ゝ
のゝのゝ
こゝゝ中の甲斐なきまに
ゝく病と求め風なして波を生し
奉競の勝負は長すれ行よ
家の害と貽ゝ
先代ゝ
此類ゝ
はゝ法ゝ
家ゝ
ゝ

さらようきに改易置して民ども苦しめ侍りしと論
けれども世おわれまゝに是は一時のことなれ
ども祖宗の代の時宜にかゝるに俗に建置く
なりゝ更へうとされまゝ有尾侍りしさる事
あるにさるべきの数に後嗣の代に或は改革し或は
改ることなれ祖宗の志をなるべきいつれ祖宗法
とくそまよ泥て世のうきひ治のさはたけとも教事
と世まゝさし生ぬ所をとて富樂と為べき行をして
善政を行べきなるまとて孝子慈孫われまを
たき宮ゝ祖宗まんもかなるべうしたく義古を援今

と論して後をけれよ義共ゝ宋をやわけるうちみ
事後結局ゝ為ゝ下て法をぬ

けもゝ卅

われ時諸方事を今てけれよ義ゝ傍ゝ高好ゝ徒然
事われまを今ゝ一人の方ゝ以ゝ為好を傍治よそし
為ゝ者ゝ風ゝ人情をゝ以ゝ人ゝ順を解しわ
義も好て是迄ゝ義ゝ病中所しうちゝ日を
くしいゝ故ゝ今ゝの書を兒輩ゝ為ゝ有ゝ
方ゝ書ゝさして好ゝ人ゝ侍ゝ人ゝ民ゝの一人
為ゝ是ゝ是讃われ人ゝ世中ゝ者はゝ義ゝ

思ふなり。然世は一種の僻人にて、高位を求めず、名利を捨て、閑寂を楽しむ。因て世にて世捨人と名付る。

彼の名利を捨て、閑寂を楽しむ。高師直の為に殺されたる。北畠親房卿の高師直の為に殺されたる。

能書を好む。甚深仏法に成る。橘服忠の為に殺る。

仍て伊賀の国に逃きし。我を知る者に遇て、幸園右衛門に載て、其時の旅なれども人多く集り世に論らひ交る。隠遁とは名利を捨て、閑寂を楽ぶ。

隠者の様なれども人に交り、さて俗世に出て俗世を楽ぶ。詩・歌・連歌・猿楽・能・謡・舞・琴・碁・出離・茶・花・女色・酒・遊興・狂言・絵・見世物・織・うわく・表・さまく・俗世を

隠らんに付て我が為にあらざるを思ふ。幸賢を能く書。二鏡・第巻・物語なり。

世に流類なる。

源氏物語・伊勢物語・竹取物語・宇津保物語・落窪物語・和泉式部日記・紫式部日記・枕草子・和歌・連歌・俳諧・謡・舞・琴・碁・出離・茶・花・女色・酒・遊興・狂言・絵・見世物・織・うわく・表・さまく・俗世を

弱なる男女中。婚姻して夫婦の中。媒・媒人・遊女・遊女・遊女

統して毛詩は淫奔の詩を卷て節儉を志とせり。人の戒世の教とすべしと云れども俗作はいよ〳〵放逸にして家の事〻雅頌を編述こうゆとなりぬ。二南八脩分齊家の事〻雅頌を編述德の婦世風をそなへ男女各書情の作なきにしもあらず邪もあれども其邪といふも媒妁よりして淫奔すべしといふ事なり。后妃を始め貞女寡婦淫奔すべしとなり。又伊勢源氏のごとく邪淫の事ばを始めて勸めて教ふ邪を見てこれを作る事なり。伊勢源氏。いと〻長恨歌西廂記なるべし。其兄長ありて醜悪なる

ものをうつし。始めて聖人垂教の書をばしてしるす。佛は氷炭薫蕕と別をしるするなるべし。黄帝の時國祚長久佛はたうまれをしるとするなり。荒淫作をなすして。父子耽色の事繁しすべしなり。始皇の時始皇高祖やすするなりしさて自殺の跡しるすべし。多くは奇怪妄誕の談なり。孔子。俳諧副陋の說。孔子のなりて義法なるべしなり。書て法法弟子の地も足あるべしなり。書は書數する所なり。佛法の書載る所。佛法のさまざまなる所を載すと陰陽。風雨を社人情をうつし又世をあらはす程くの事をしるしたるものなり。

[illegible]

中ごろ雜念とゝのゝ[illegible]

[illegible]

[illegible]

ちうけ、ふつゝ君子ともいへどもてなすべきまことずくまれ聖人と
の給へり。然も徒然草の中の一節。ふつゝ君子ともいへども
やはり人間なれば。有無の義なりとあり。又云
影響とやうに。善惡とりくみ。善惡せうあるべし
やはり人間なれば。有無の義なりとあり。又云
言語飲食ふつゝ善惡とゝのひ。ゆくゆく我と善き
角なれども。雖も、そねみ。ゆくゆくもう一生と
おもふ。ゆくゆくやはり善惡ゆくゆくもし。捨てあり
やはり善惡角なれば。雖もゆくゆく

もよりやはりおもふ物と捨。やはりゆくゆくもし。
好も物ゆくゆくわるゆくゆくもいはれぬ。よのゆくゆく人の
有よりの語やはり。但善好も老荘の考と尚人なるべ
きも必一も、そんとせば必ゆくゆくなるんやはりせねんやはりゆく
なる見。今義の此語をもつゆくゆくなり。孟子に
可以取可以予取。可以傷廉と云。其云此語やはり相略
可以取ゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく
ゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく
ゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく
ゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく

[illegible]

[illegible]

[illegible]

いくすく戦国と考へ合くすれども、さく仕きまのやう
なるまでも捷那の思織なくてはなりがたき事なり。尚
人と称とかの事なるべし。戦主失ひ楚人
滅亡と云ふ。天下に利なしとは、楚人
滅亡といふとも其織量一、うきたきなるまじ。孫左衛
門尉ごとわしび其云行世の偽りなる事、遺恨なる
まじかの事。

渡辺番

和歌時諸高本舎せ、義はれ、ち義は家風に出
とよみよせ、ごとの義材諡行の人とわれる仁主。

人たいうと凡

ゆる費物治なりとぞ。ゆしも通性のさくなるべしとぞ。就録
の新も風史さくめ時改本実の界と考るさ迄にて、高時
は人物、又さ人の云ひ、さ戻、さ手人義さもれ、ちは
さ、さ、王へきもさ、よりさく忠臣義士ばかりも世る湮没
さく偽ら、そしも家風は一名まりとさく。其後武家の
世よ、さく旁将列士、若の名の風は名の死と潔しさる事。歴
挙すれよりさ伝わらば、まりて先さ、さ、ば義の勝はなる
下さなんうしさ、さ、よりよ、ちは治る人中く、いて。平家治世
のさ、めれの堂盛とし、さ世と賢人とも称ぶ文治
墓暴逆ゆして考る背、と重墓さのちるあく。忠厚海

あるいはのうつり給ふ。誠よ後世后子多き者は法をすべし。
さるを北條氏は、つくづくと思ふに、男風へ今を後ぜず、事を
材藏暗弱なりしかども、其子維基・泰時・
おくれ島の明義、おとなしきを、敬しみ用ひ、天下の人々
係りしも、泰時嚴ならず、子として、子を驕奢ならしめ
なり。北條の名佛事をなすとて、其能を多の君臣を
富壯なるもわまりも、世代を傾し、優柔不斷にして、材力弱け
き人。將率ハ運籌決勝に暗く、文章ハ出師陣の旁
なり。さきに、結城忠清の大將として、しばしば振舞
しも、維基と同じく、其子泰時の人、十歳もたき

よりて、嘲弄せ、世ひとし、又統後鳥羽院を流罪
なり、市民金堂の時、書紀揚くなり。寶永年中、
安徳帝を奉ずして、西海へ逃し、折しも、兵船出行して、凱
旋せし、塗中、車駕より出合て、和ちて
へ、ひとつとも、我の至下なるべきを、
しこの平家の勢、内より滅亡すべく、又
逃去て、秋門より入れば、肥後入道、
の世、なりしハ、源義経、義経深
よりて、初經より、用ひ、元降し、
けり、抑撥行脚して、あるべく、伽して、

仰られ、きさまくし。恥とおもふさまの。あしきものゝ。そしりにて
後世右馬允番。つまを感し。伯耆。義経西国に落ち時。後世
おもく番。つゆとくよりまゝ。いとをしき。番あはれて
見まゐらせ。後世。義経。国へ。関東へ。きこえ。梶原
おもはせ。十二月。十二日。を。所々。流罪。追付使。
内遠京。ひらの。右兵衛。きたりて。十世の。宿。
行のまゝ。なりぬ。加賀の国。[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
番。妹。をもとて。なり。相模。[illegible]

仕て。彼所。[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]ハ雲衛の事ヲ伝ル。其所ニ妻ヲ[illegible]て生捕まゝ[illegible]て
[illegible]辱ヲ[illegible]ル。強ク[illegible]ル。[illegible]ハ源[illegible]
艶女ヲ欲給し。[illegible]ハ源[illegible]
[illegible]妻ヲ逐近ヲ[illegible]ル。丈夫の[illegible]
[illegible]ヲ恥ずして、父今[illegible]
[illegible]ハ[illegible]
[illegible]ヲ燬し。事ヲ自[illegible]
[illegible]ル。鎌倉ヲ[illegible]頼朝のおそれも陳謝し。[illegible]
[illegible]ル。[illegible]ヲ逐近[illegible]ても[illegible]
[illegible]ル。罪障懺悔の為ト[illegible]ヲ思ひ[illegible]

光源院殿
足利第十四
代將軍義
輝

金仙佛

[illegible]ル。近世松永弾正ハ[illegible]ヲ[illegible]ヲ信ス
の趣ヲ[illegible]ル。[illegible]ハ[illegible]ヲ[illegible]
好義長ヲ殺し。光源院殿ヲ[illegible]ル。[illegible]
[illegible]ル。この人ハ[illegible]
[illegible]ル。嗚呼佛法ハ人心ヲ蠱惑する事[illegible]
[illegible]ル。寛文の法[illegible]ル。松平敬伊直ヲ信仰軌政の時、中興
第金仙ヲ[illegible]ル。かく敬ル[illegible]ハ[illegible]
て[illegible]ル。天下ヲ利益せ[illegible]
[illegible]ル。[illegible]
創業ハ後文明[illegible]ル。[illegible]

かすることなくしきりにはたらき、死中も動かず法をたもつ。さて、八伊を去る者改多き中より始めて上国に至り、天下の殉死を禁じ、諸侯人質をやめ、大佛を壊し殯葬を禁じ、世中も大慈量もちまよいて佛を信ずる者殉死を禁ずるに、後世其害を除き人質をやめらるるは、おのおのの患をすくひ、大佛を壊し殯葬を禁じ、世中の大功徳あるべし。但し時伊を去る頃なり。諸執政いまだ明らかにして法侯法役人を対して私の怒なく、忠を遂げて死を行なえり。法侯諸役人も各おそれ怪しむ。

身持もこの一つのみにしかるに已この材智をもって人をあざむく。法侯已に権柄をとり、下をあざむくに、法役人と執政の威勢よりうるはしく上に行なわるる。法役人為人官たるに付き、必面爭して言を尽くすなり。昔魯に仲禽魯に入封の時周公周公執政なりしに、平易近民民必帰之との仰せなり。諸執政の法令を明らかにすることなくして法遵よりなるべきなり。その作りて聖人の人をとりこのみたるは、其人民化のよく盛なるまで上に行き盛なるまで上に行き盛なるまで上に行き

はなはだ新たなる人といふ人に執政府の侍従あり。この妹の
文姫はなきをとりて伊達の
頼宗と好みて、其為人なほざりの方朋と似たり。ある時つねうちの
給と獻上しけれど御覧あり。伊達の人々
きつよ。給は塵ばかりもなくわたりの八伊達の
なれば、ものをくゆといふ。伊達の
ものは、こゝもとにはこゝもとや
あらんとやいふなりとて、伊達ものは
なかなかとて、さらにあるべからず。氣
と、うくよきをなりと、いふ。新たなる名聞あり。御念

の、とゆうよくは、御まとなる妃きさきおよそ念とは、
あるべきもあるべからずとゆうと。伊達のやうの念とは、
あるべきもあるべからずとゆうと。伊達のやうの念とは、
方士を命じて楊貴妃のあるところを尋ねしむ。方士蓬萊
宮に到りて貴妃にあひぬ。ゆくへを尋ねしに、
玄宗
ものをもとめしに、死籍にあるとあり。念
ものくゆ。こゝにて世にあるものあるべくして、玄宗
貴妃の容貌をはるべく還報しなんとて、玄
宗に方士を呼びてかくなりとゆうと。此容貌
つまはゆうとゆうとが、他人にあるべきあらんと方士

[illegible]

[illegible]

[illegible]

おとしたまく。爭かまよ無て攻法しく仏事長時のい
はてやすさまく方士道業言ふ拙僧とこの屋のまよ
こ拙くかてまとまと思ひ出しかくおもしとまと戯れ
こまき物作かまとと。伊達ちる浮よさとく人の云とすくば
こまこと多く今馬おとまり所業出く丸まれそ屋をか
ちこと折物。常人かこ片牛くまとれとけ多。たか
ひこひ作くかし何云ちさくやむ貴まかこ岩に者の氣
多かく捌人廣世ふ中とも。いく民我わやまし多こと
もこまれおこく作こまく作こまく仏事ちれんこて無量
の大きかこもちまとふれ世よ古今比良相とするもの浮を

と云ゆこそう。兄とこく見こ世の権威よほこりを遠慮と
備こ人々働く馬援こいこ井底の蛙也。嗚呼あわしいこと

泰時の云欲

他日続くの今よ。端ち前日玉まの人物共に伊藤東を
て伊藤金こ前共人物こ多きまこ及ん。
其中よ義の石塔共人々雑くあくと義藤金
治世の作よ多く小條泰時こ我。漢の丙魏唐共姚宋おもば
こうこうね人中共ひ。国中こわ中比類なこ人
母尾の明慧よわこ。某不肖ふ所とこて主任よ者。
知下こ陳こ作こ、こう云く所を治め年とあ作くしこと

まつりよ。明慧ゟ云ハ、、、、と。泰時ゟ、、、、
事ゟ云ハ、ゟ。那下ゟ、、、、云ハ、ゟ、、、、
ハ、ゟ。明慧ゟ用ゟ、、、、て所ゟ云ハ、ゟ、、、、
ゟ、、、、。泰時ゟ、、、、信して。父義時死去の時、財
寶ゟ、、、備ゟ配分して。其外ハ、、、、ゟ、、、、
ゟ、、、、。二位ゟ尼泰時ゟ自分ゟ、、、、
ゟ、、、、。事ゟ、、、、
ゟ、、、、。第ゟ、、、、
ゟ、、、、。二位の尼ゟ感涙、、、、
族肅穆。鎌倉ゟ、、、、ゟ感服、、、、。明慧浮屠ゟ、、、、

誣

ゟ。孔子ゟ李康ゟ、、、、ゟ、、、、
ゟ、、、、。泰時ゟ明慧ゟ、、、、
ゟ、、、、。聖人ゟ言、、、、
ゟ、、、、。泰時ゟ、、、、
ゟ、、、、云聽、、、、
勢ゟ、、、、。那長ゟ、、、、
ゟ、、、、。明慧ゟ、、、、
ゟ、、、、。泰時ゟ、、、、
決、、、、。泰時ゟ、、、、
、、、、。

くもおの地と定まりて。一云中古の頃より
うくやうに春時感じて。山爭ひを海の中
決新すべし。但某今と多くは新をきしかども。即在る海の
ちくぼを服するものなんぞ。そこと書せずして
きとく。別に恩賞と行なきー
なく。紅座も冥土なりーそれ。山まはやん古き物語ふく
ふしてかくいーの古に戻。其後芳へとーなりし。山一まはやく
も。春時は云ひあーて。安信老ーと芸辭と書ーしなを。
又恩感なーしかなりーの山きまもきーまーと。其孫縁の
ふき後嗣に及ぶく。時頼時宗い。行とも遺制とせる。敬信に

倣ふくーく改と勅ーまーこの代官は人公孫命に鄙せる
ハなり。小條氏貴朝の陪臣まーく五ーは格と執く数代は
安ーと屑ーる。春時は功といふ。世に時頼と春時とを
賢明なるーに称ぬるーを。ーに思ふく四代ーの高
位を脱履ふく係屠に沿ー。傲行とあーを下情と考ーる
ーと。ふ物のまーーーく。ーーーと先ーを無ーと
人のーーーーー其所宗廟社稷の重き責任に自ーら体
ーる逃ー。敬行と楽とするまーやわく。君徒と職ー治
體と考ーー。人ーーーーーく人ーーーく規模
を小ーーーを大ー時ーーーーーー。ーーー春時ーーーー

人、よわし。其外縁金氏人物と考るに、上下ともよく〻ゑらぶ
多き人なれども、但建国のゝち、わるゝ氏人材暴ゝ多
集まりゝるに、血氣剛悍の人ゝ、性もまた粗暴云識。
皆降灌ゝ下わくゝ。其中に名山堂忠を、勇力世すし仕奉
壮士といふべき者ゝ、志操潔白にてきこゆる。
の人也。世に和田ゝ益稔ゝ、梶原ゝ景時、梶原ゝ景時
一時、折紙文をもくゝ陳謝せしに、一生偽とゝ
稱ず。今文折紙文多く表ゝ、ゝ、ゝ、

楠正成、これを興論の弱きを以て、其人を
いとく、菊房を以て卿輔部の位に
あるに、其材の大小を、こと、正成に
房、菊馬に練、直言極諫朝廷に偉勲、はなはだ
の風鳴こゝに、惜きかな正成、順後の功を世論じ
其に菊房を一練に後醍醐をさゝ世をのこ、正成を其
分国に死すべきのことわり、忠義代く表に傳へ、天下に
さゝ。当時、正成く比すべき人、
仍世に伝へさるを、その為人こと、実まを
以世に楠家に遺書をく、きまを流布すべき地をとゝ、ハ

後人の偽作なり、人伝へ、もとも其志義を、養ひ
一株をとゝ、ちゝを引みく、始孫、
量の多くまを、義を思ひ、
一義の名、名の勇士、
夕を多くさゝ中に、楠家の孫累、
制を、一門国族心を、
国く報ひ、三代の名一人と、戒心
なるべし、正成徒澤深厚
なるべし、こゝ、
すべき人推ること、法葛孔明に比すべき、

喪

とも無後と謂て父子同時に死するも同じ義なるべし
きとさるべきなれども孔明は卧龍なり道德を懷抱し
功名を遺棄し茅廬を出ずして一生を終んとせしかども
時運蜀の先主の三顧に過ぎ不得已して出仕し
一命閑道に上り高位を居し第宅の奢侈なること八王の
如く伊尹呂尚に比すべきなり中の人なん古人の論もあるべし正説
八王は功名科中の人なり
後醍醐帝笠置に除幸の時を國民蜂起を徵きしかども正説
も所詮なくして奈良に行わるるなり其のお処孔明にとて大きに異
なるべし嫉後の後も尊氏義貞の上に列して出身任用

せざる時にあるときは孔明のごとく擬せられ是を其偏に
あらず其兵を用るも孔明に正しくして奇計を立て節
制の兵をいましめ給て強敵を破り韓信に似たり鐵
項羽の易制を考て正成河内に奉居するはまた既に鎌倉
の易弱を考えよりて韓信を征を見て蜀に項羽の
勢て其勇を恐るるに正説
後醍醐帝に謁して蜀に漢高祖強き君勢て其強き
ハ情よりあらざるまとうふ其後南人たる多くを蜀漢
用て取勝しまず常に韓信を裏河背

水敵を破り、正成を弱、本偽敵を慶ずるとの人、あ人の兵を用るあと一轍より出さるこの所ぶとも推堅拉枯とゝ

や、韓信の材を敏速より出してゝ攻、よるこのちるとき

うゝ正成の材ハ持重に多くよくちるゝよるこの攻ら

ゝ韓信より塔をちらしめ所よく正成のこゝ力のこんこ正成

より敵を攻しめ所よく韓信のこゝ力のこんこ力人も攻ち

弱こと所ゝ、ゝ力人、戈、義のこゝ決ぜるこの西也、ゝ力人と

韓信の兵を利、能ハ和より、ゝ一生の名あり、正成の兵を

忠義のこゝ、国家ハ為ハ、甚底績ハ人物ハ作ら

同ゝ、ゝ力人ハ作ゝ力人ハ作ゝ力人、義より、

今則ちのあゝ正成南朝の明神と號すハ、和あるこの中也

と正成ゝ力人、ゝ力人を孫より昌正成常ゝ力人天下より

武功を立るゝ孫昌ハ、ゝ力人、ゝ力人、ゝ力人、

ゝ力人と紙ふるゝ、ゝ力人、ゝ力人、今より正成の生ゝ力人の民ゝ力人

と生ゝ力人、但正成かゝ力人絶倫の材ゝ力人、聖賢の道

を学ぶゝ力人、孫昌の術をゝ力人、ゝ力人、ゝ力人、

湊川ゝ力人自殺ゝ力人、ゝ力人正孝と最後ハ一念を落ゝ力人

ゝ力人、ゝ力人、ゝ力人、

足利家の机を

足利一流の後幕ハ、ゝ力人物ゝ力人、細川頼之とハ世より良

相ともに行はれ給ひて君臣合体の幼主を輔け奉し
下を御せられ給ふ所のよし光如は材力いとゝ抜きん出
て君威を強ずるまゝを志して官〻陳若用邪とを
もつて政ざまを義成昏弱の君なりしに其輔佐よろし
い〻やう如英とをもなるゝ賢人をもつて騎奏をきはめ
逆を肆にするゝ事なるに教ゝと云ども其羅をのがるゝ
ことをえざるゝ事人稀なるに其利害は名門
大族にあらざるも頗る將軍よりおそれさるなり應仁文明の比
多部せる細川名山黨を方ち鎌倉の氏和上杉雄を幸
ひに和合戰して虚き月なし考の〻あらん君臣相害

親族相殺して毒鬼蛾のごとく其暴虎狼のごとし天下
の人倫の道絶たり命の月地に隙さるを知らざる
ことを古今孔世の極となす〻李唐代
李唐代の初より似たるこゝろあり〻李唐代
宋代時よりも〻其氏者の度を多くなりしよりも
う月揚復恭の招宗を已うゝ夏心門生天子
やゝ〻とゝ古今よりの義まゝ〻おもるのすゝ
うゝ如しこの其後我邦近代の野史中〻新論を人猶代
の人を背〻やうやわれと云ひまわれと云ひ〻さくも
孔世の風俗うつるもやまもの如くなるまゝ四民行はし

さて世代應仁の後只利義政代を弱るおく前後有名なる
其名聞高士寒庭飛廉の徒よりさて世代賢育勲舎ゞ
類なるゝ中ゝ賢臣得失と論する及た從孫倉あと
移れ時古田道灌て我名聞なる義政なるゝ
上杉氏山内扇谷古堂ゝ分とゝ山内と宗家なる
此時戦後の上杉房顕山内の家業絶ゝ其子顕定と及ゝ
道灌と其父道真よりて扇谷の上杉定正の家老なる
定正を多くけゝ顕定を嫉ゝ婦庶の義を謀ゝ軟弱なる
驚ゝて扇谷を奪んゝ我分の輔相なるゝ男愛
もあるゝ者を反ゝ禄を奪ゝ山内の柱を奪ゝ上杉氏

和なりけれ程よ終よ長禄を招ゝ定ゝ国ゝ顕定
の為よゝ絶さまを多ゝ悪ゝ為ゝ其材を庶ゝ分と保の
よ多ゝさまよ終ゝ者ゝ我器せられ多れのゝまわ
所ゝ久学よ者ゝ倭歌を多のゝ不れ孔世を得る
者人ゝ多ゝ者ゝ歌ゝ法と思ゝて感ずるゝ世よ伝れ
ゝ法時ゝ我分ゝ多ある歌ゝ世中ゝ道灌
敵よ多ゝ為ゝ時陸奥よゝ多ゝ中ゝ定ゝ幕
景集ゝ彼ゝ自ゝ多ゝ禄ゝ多ゝ芸中
よ此歌ゝ中ゝ其和書よゝ康正元年の多ゝ藤沢の俊よゝ
多ゝ味方も入ゝ定ゝ此日ゝ定ゝ

すまひのあぬさまとも味方より武威をつくして、あつく義を
憲宗のゆゝしきに自脇して、仕長とおのがじしむかひ
ありあらそひつゝ、ともに死するも侍らば、後代
のうしろめたきもあるべき事わるし。味方は中村殿の
お、舞後京童頼やすく、京家より人の世よりたて、風形技
持ちらまく侍らんしよりの敵の男を乗毛なれば弱き事
二ツ引ものしよりは、のがれ難の後はさらさしものわるびくらん
月なりしよりは、ひの毛も、うちうちおもひけるこそ
うゝく途とおもせしよりは月の面より敵の男はきとあらまや
うゝく中村をはすらん者をねく我陣よりあらて、うゝくと

なん侍りければ、いとゝ壮年中もあらぬ男より武威をつくして
たけあらそふ事、義のあらんにあらず。鬢のわるきあるべきたた
きあらば、おとゝもいやまさるべし。わるなりしらんやうねあの
けなりし。中村を牧あるのやさしく義よ敵をもあらそ
ものをもとすれば侍りとて侍りけるの前よりひとく。
つゝく義とさしあらそふ食れば、うゝくなきみと。
おとゝしらずば、を牧あるべし
なるの力とも、雖も、然とも、いまはは
をしおもふ、ばの灌の弟子、孔子の弟子、勇士不志喪
元ゝくいとまもうるひ侍らん。さまと古の勇士の不志

喪元といふべき志を名義とおもんずるわれ、貴と劣と
あるとも義を先にしてこれを必ずも義場に死を惜んずる
[illegible]我名義の武士のうちもっとも
志義場に死を惜んずるわれ者といふべき
せばかりなり。われこそ名義を義とするようなれ。高
ともむき同じかるべき。もちろんわれこそ高
やはり其金議を先にしてくさくさ[illegible]
も事なく死しなば、きっとこれもいさぎよ
やさしく義をもってこそ。[illegible]
武田信繁

[illegible]
[illegible]利氏の季世天文永禄の頃よりもっぱら賢と称すべき人
なり。甲州武田信玄の父たる典厩武田信繁なるもの。物ごと
代武功をのこす。強ひて信繁は[illegible]
[illegible]信繁は[illegible]
[illegible]
[illegible]

ひとなりまこと。幸ひ仕へまつる。伝吉は父を失ひ、国を入る
まとかの。信虎海を渡り船に流れて一生をなん終りぬ。伝
繁信虎の死を聞きて、伝繁を奪ひとらんと
すれども、つゐに伝吉も知らずまかりぬ。
まこの国のおもむき信吉は
を追ひ、後の人かの忠義を感じ、
志のまこの伝繁嫁娶の日なる虚かりうち信吉は、こと兄弟
の日なりしも、遠き海わたりぬ。
強き光武のたまふ。後漢の東海を
王。此幸母寵のよろこび。
世をとこと言ふ。

けれども、其後此幸は、
しも身を全して、
しもとこと、此幸孝友なる
なる。伝繁を
朝夕嘆き、
より、親任して、親戚
人皆感涙
門中
信吉一生
とおもふ。

なく、事あるを恭儀ぶりして、
前史も慶賀して、
孝友なる
義の
常
実
義
死せば、死せざるこの
命を
死する義を

ちまく。あるいは自殺せんとまでもおもひ。佛を見奉り、後生菩提とこそ
し。其ゆへ佛ら多く像子。ゆきあひ人ともなれば。一ら〜て恭
敬驚嘆せざるなし。其中一番に。名を海と
野中の戸。堅き海とかなるとも。尼君事際に居こそ舞て
こんあるくうらといふ。又一番に名をこそ、名をのに法をこそ
も。後庭に出入すくうらと。又一番に法人同座する時。好
色の徒を交ら。貴人をも。ものいて其座を立ちとい
まく出ぬ。信無人。うら恭なる物。ものも分をもち
あと。嚴心中。うら仰中も。信を同せず。其高風清古
人を恥さらく。又一番に合義を。恥く時。敵ちらくなる人
敵を無よわらを。ものあり。ものあり。ものあり。ものあり。ものあり。ものあり。
言わるく。言をおもふ。ものあり。ものあり。ものあり。ものあり。ものあり。
威光異く。羅綾を。ものあり。ものあり。ものあり。ものあり。ものあり。
やうに。ものの。ものを。ものを。ものを。ものを。ものを。ものを。
ものあり。ものを。ものを。ものを。ものを。ものを。ものを。ものを。
うく滅さらす。ものあり。ものあり。ものあり。ものあり。ものあり。
信玄死して。ものあり。織田氏。ものあり。ものあり。ものあり。ものあり。
ものあり。ものあり。ものあり。ものあり。ものあり。ものあり。ものあり。

長沢の太平

後醍醐の本命。けれども。例の難。ものあり。ものあり。ものあり。ものあり。

武田流の兵法を稽古するよりまさる事なし。故に上古より信繁
繁が敵をくわのうちにくく敷をあらそひ法をつくしと、いくさ
かつ勝きまのやうなきたり。武田兵の要を得たる。信繁の
ごとく無敵利を得たる要のまもり思ふ其上なくて
も兵法の本をわきまへ法をつくし。
其四て兵書を考へ人ちよ兵術の要を孫武十三篇
あり。十三篇の要を軍形兵勢の二篇よりあり。軍形
兵の法を形勢の物ごとくこれ常法なくハ
は軍形を軍のことなり、こんこう。兵勢ハ兵
のきをもつて兵用ふやこんこう。軍形を行師の法

て。兵勢を合戦の法なり。軍形を行師の法なり。人僅
而をこそ人数をもつて足なくまくこれを下知と
やうなあるべし。はつくこの三軍を師をおそるゝ時は高くこれを知
をうつるこゝ。こゝ自中よりこゝ。行師なる人数等
よりて割あつて。軍伍をきめ。物主をきめ。兵
のまもと分配をはらよきこゝ人数と一定の形をあらく師とやきた
この軍をもつてのもやうよりてやの兵造作ちやうくあるこゝ。定の法
弱きこゝ。こゝ法をくこゝ。生する物。又兵勢を合戦の法とこゝ。
常の法きやくこゝ。こゝ考へ法急変に降こゝ。こゝ延
きは度を考へ始こゝ。はつくこの合戦の物頭こゝ呼吸の方よ

あるとき逃げて向くべき方なし士卒の勇怯知るべしこれ
猶豫して決せざる帥命あるべからざるなり人教えて曰く
あるべくして行わざるは是れ人を教えて
敗すなり勝利を得るは兵勇怯にあらずして士卒の勇怯
にあり強を以て弱を撃ち弱を以て強に敗せしめ猛虎深
山を離れざるに而熟震恐し臨穽の中に在りて尾を揺
して食を求るが如し猛虎よりも弱くなるべし又お
のれ敵に向かうとき其の主時を乗じ兵を用いて常度
を失わざるを知らざるは是れ嫉妬の怒を以て主時を乗じて
あるべきを知らざるなり

て勇怯の勢を知らず強弱の形を知らざるなり但軍形を
知らざるは兵勢を軍形より生ずるなり軍形は
必敗軍を見て知るべし古の善為る者は
士卒勇なるを以て敗兵を先にし而後に求勝す
軍敗れざるは必勝を責めざるなり先勝を以て必勝を責めざるは
敗るる事破斧の如くなるべし長鉞を以て義を敵を
水に於て千仞之谿を絡者敗せざるなり
其勢を以て義を必勝の形を定めざるなり
今義の場を修めざるを以て勝を求むるは

いとたやすくおそるべきなり為ゝ
おのれをしりまた士卒をしんぜ
ざるの人数をわかつ事なかれ
ひとしくさまたげなし別長勢なり
ゆえに善を海して激水之疾至於漂石者勢也鷙鳥
之疾至於毀折者節也故善戦者其勢険其節短勢如張
弩節如発機ゝ
ゝ合ゝ
ゝ
ゝ

なり。孫子の兵法を論じて、善戦者求之於勢、不責於人。故能擇人而任勢。任勢者其用人也如轉木石。木石之性安則靜、危則動、方則止、圓則行。故善戦人之勢如轉圓石於千仞之山者勢也。孫武の此一字一句も兵共肯綮に中たるの義なり。孫武が兵法を論じ、孫臏韓信の兵法

さてまた孫武の兵法、武書わかつて、自ら兵を用て敵を料り勝ちを制するとき、その一つ呉を盧固の間に敗せ、十三篇を著す。呉を伐せ事、史記孫子の伝をみるに、盧固死の後、強楚を破り郢を入、威を振ふ。

宮めく孫武が謀より出て、世を傳られたりとぞ。その事実ちがへり。孫武が後孫武が兵法をもすくわつて、功天下に著す。孫臏韓信の為ちがへなり。孫臏は孫武が子孫なり。兵法の兵法を傳へ、齊の威王の師となり、時魏より齊の與國趙を圍しを、威王将田忌の孫臏をさし副て趙を救しむ。孫臏は其事を魏将龐涓とともに兵法を学べり。龐涓その能を嫉み、陰に臏を召て刑に処す。龐涓が車中より出て軍の指圓を志るし、田忌すでに趙へゆうすとて、孫臏をして魏趙を相攻めしむ。魏

の將兵銳卒必ずや竭し老弱運漕して内に罷るを謀
るべし趙よりもかつんずるを以て先ず魏を大梁に
衝んずるを志す是れ我國の危きを救ひ必趙をすくて
自救む者なり今こゝに一卷して趙の圍をとるの
なるこゝの弊を魏に收るなり大軍を以
しこうして魏師果して趙を拔く還るけれども迫へ擊て
ちよ勝利を得るを以て趙を救ひなり趙を救ひて
乃ち兵を以て魏を攻る形をもつてこれを虛に急
迫の勢をもつて迫るこうは魏師なり趙をすくひ
疲さる事を得べき者なり

形をもつてこれを虛に急迫の勢をもつて迫るこうは魏師なり趙をすくひ
疲さる事を得べき者なり

形をもつてこれを虛に急迫の勢をもつて迫るこうは魏師なり趙をすくひ
疲さる事を得べき者なり

すなわち孫臏こうは魏を伐て趙の圍を
とるなり其の形勢を無するなり孫臏も
形格勢禁すなわちその形勢を解るこうとをすとこうは形を
むしろ敵必形をさらく解とこうは勢をのがれ敵必勢をせられ
く自由をなるなり行をのがるこうは我が中を墮るこうは後
十分をわるなり魏を韓を攻る時韓告急於齊こうは
田忌又將兵をもつて趙を救はんとすこうは大梁に
勢きをもつて魏將龐涓を圍く韓を拔く而して行を奔
師をこうなるなり生をわるなり孫臏田忌をいうなり二晉の

兵事をつゝ悍勇なりて齊を法とし、吾我を敵の勢
よりつゝ、その勢ひを誘ひ導きて、己が思ふ圖
に付き、敵を百里にして趨利者蹶上將といふ。
いまし魏と語らしめ、而して利を誘ひ、
齊師魏の境に入る。一舍すれば十万竈をなす。
明日は五万竈、又明日は三万竈なり。日くは、我を
減じて、軍行の強を遺れ。龐涓齊師の
後を追ふ。とせば、兵法に、
八、我が強を齊師怯きまを去れ、とあるを、吾地
入年二日にして、士卒既に
半ばに

さきに退けんやと、吉日步軍をすゝめ、路を急ぐこと
十日、二日の道を一日にしつゝ、孫臏言ひて
曰、馬陵に到りて、道狹く、阻隘多くして、兵を伏すべ
きに、龐涓を待ち、而して四に伏す。大樹を削りて白きに
龐涓此樹に死せんと大書し、弩を張りて、
射ることを
すべし。万弩を伏して、夜、火を見て、俱に
発せ。者、多くして、衆を以て
其兵を待ち、龐涓果して、暮に来りこの削き木
のもとに、この書を見て、
火を
とり、読まんとす。未畢に、万弩

倍よおこるべしこれは魏師なり故をもつて龐涓自刎して死す
賢子のいふなるかなとはこれ孫臏龐涓の業を孫臏
を見る時人のそしりをきらふ者をきらふこと
ちらばるがごとし子の戒之戒之出乎爾者反乎爾者也とのおしへ
しめしたまへるこれ聖賢の云ひ給ふ所なり
なるべし世を治めんとする者わきまへ
前をきらふ者はこれを能こと多し
前を捨てる孫臏はこれを能こと
竟を減じて樹をきらふ是世間

敵を形よりも見ざるなり故に減じて見せしめ
敵必逃と信じて疑き樹をきらふ是敵必走と
乃ち方弩偃よ寡す方弩偃よ寡すは敵自刎
して死す一やぶれて敵を擊よのせんやう
敵を料
孫臏は魏を破せんは
一人やいつしか漢の初よりおこる紀の法なるの中よ韓信は
敵を兵法よ精きて合義のよろしきを歌を
攻る時背水の陣よりまさる人今よりのち世よ称する
事なり長沙よ右倍山陵に前古なる法といふ軍法の
やうなり孫臏は常勝なり敵を同じく変化する兵法

も常敗すべし。此時趙兵二十万と號し、漢兵数万なりしに、其こゝに陣をかまへ、渋義の人なり。韓信あまたよりてこれを攻しかば、陣をくづし降をこふ。彼は死地なり。一たび敗れば、ことごとく死する故なり。

趙軍漢の軍に死地なり。必ずあれ用ゆべきなり。

我死地の所をもて、猛進して敵を撃ば、必一戦に勝利を得べしとて、ことごとく其の陣を破るなり。

常時法則なり。如中を使ば、敵も

ゆきを見て、ことごとく去る。然しかれども、敵もこれを防ぐ。

こゝに至勢なのせつなり。

けれども、敵を去らしめざるべし。敵勢くも無勢なり。

敵をして空壁逐利しめ、趙旗を抜く。漢の赤幟を

多くの趙軍此氣を奪ひ、やがて降を敵を敗るなり。

しかして、自兵の勢をもつて、驅使して、背水の陣をしく。

敵をして、死地に陥れ、後に敗勢を逃れ、合戦をもつて、

自ら将兵の術を論じて、孫臏韓信の兵法

もつて孫武の書を考るに將意を含てるこゝあり。故に
敵を屈するこゝあり。形勢あり。其勝を出す。孫子曰
すや。先為不可勝以待敵之可勝と。先為勝とは我
を全ふ敗の形也。敵之可勝とは敵を可勝と敵に
勝の事。其機と形とあり。其我と勝を決す。其機と形と
あり。其機を為くこゝ淵のごとく。淵の如く藏れ九地之下にあり。
ゆえに藏れ九地之下にあり。其義と勝を決するを為くこゝ
聽のごとくこゝ。雷のごとく擊。動九天之上
にあり。怒るこゝ怒るこゝ。考正相生。虛實相形
の變の玄端にあり。兵術の妙。ものよりもこゝ

ものきまりなし。但其勝敗あり。こゝ神速なるこゝ。兵を作動するこゝ
こゝ神速なるこゝ。其対策多く。敵をこゝ之を長陳
すこゝ。軍政兵勝也。作るものなり。
更に孫子曰。退居すれば行。軍政兵勝也。作るものなり
考こゝ。敵勝を明らかにして。其勝敗の數あり。こゝ
まこゝ。こゝ。周なるこゝ。反こゝ。兵家の中こゝ君也。若勝敗の數
生也。こゝと探究こゝ。兵家の中こゝ君也。若勝敗の數
暗くこゝ。こゝ。也こゝ。周備こゝ。號令と煩こゝ。
きこゝ。おこゝ。対こゝ。兵家の中こゝ君也。若勝敗の數
ゆきこゝ。こゝ。考こゝ。兵こゝ。する行こゝ。敗家こゝ

拙くして巧なり。況や長安の長たり。況や長安にて
やすの日ごとに人を殺し、やすく国家を害と
賊をなすとすくなかりしに、蜀の先主を用ゐるべきて呉と
攻らば、七百里を連ねて二十屯をなして、呉や、相拒むこと年
を経るの巧なりといふ。先主の言ふ長蛇意迫り、陸遜こゝに
陥らんことを。我知るべくも。先代上将武侯の如虎争雄
ば、我ども先為奇謀て敵の可勝と知るべきを。先主一
我の乏を捨てを法とをく。武侯は拒ること年を経
ども、先又巧なりといふ。遜なる知功なして、僅に

其身を卿らく周滅の義、多く豊臣秀吉、ともあらんよりは仁
みて、諸暴止て九の名をくるなれば、仁
なるまじ。武士の道なるべきと。為賊の大敵なる
もなす。義とかの武士必功を一発よりして遂に長と頓て
するあと我きに、ゆゑ我為なるべきなるこの
恐らくは絶信者の乏やあるべし。其暴
みて、礼楽慈愛八義中も、ともさらに行ふ。晩義云ふの
師を起して、別解を伝代して、そして師旅と暴露多
く人民を奚肉せしこと。天下の人人離叛きたり。武長先
て收めさるの禍なり。孫武の一言、長の要者を行ふこと

りつ〻し。

兵之詭道

他門強く敵を軍令せしうゑ門兵家祝儀の祝ごとは
自〻感服し侍る。世よ兵法を侍る人も一ツ〻に成ぬ。
大ごとを抜群の流儀ゆく兵の方実無野中を指し〻
ゆゑ〻ゆく〻敵撃すると所の法中を乃ち〻ゆく敵を戦
を撓あと割きるゆゑ〻ゆくさわるくきやうよう〻して異
侍るし〻敵の後を取ゆる兵の事すよ
く兵とすると〻ゆく兵と〻異侍る。但祝儀を審ふ〻
智謀をもちゆる〻ゆく仁義の兵ゆゑ〻聖賢の

道中をすゆ〻ゆくゆる〻ゆく兵を侍るゆゑ〻いうとゆゑ。義を
て〻ゆゑ〻ゆゑ〻義ゆゑ〻聖人の方法ゆゑ〻ゆく兵
行道ゆゑ〻ゆゑ〻義を割する権謀をして八方ゆ
ゆゑ〻ゆくさ道中ゆゑ〻ゆく兵を別法のまわゆゑ〻ゆく兵
ひさる道中ゆゑ〻ゆる侍ゆゑ〻ゆゑ〻古今兵乃兵四わるまを
侍ゆゑ〻ゆゑ〻戦闘策敵割務の術を兵とゆゑ〻ゆゑ。え
事甲冑武士を兵と兵兵兵を士卒ゆゑ〻ゆゑ〻ゆゑ〻荀況
古今の兵を侍ゆゑ〻ゆゑ〻湯武の仁義桓文武君割秦の
銳士魏の勇卒齊乃技撃ゆゑ〻ゆゑ〻兵を乃道
ゆゑ〻ゆゑ。仁義を崇ゆゑ〻ゆゑ〻ゆゑ〻ゆゑ〻ゆゑ〻ゆゑ〻ゆゑ。

者之の雄を敵に勝て事に成功を衛て国を礎の頭を
捍くるなり。是を仁義の兵と云ふ。桓文の兵を信義を
主。律令を主とする者なり。之軍畏威を以て一人も其義を踰
ずして。是を其割の兵と云ふ。嬴秦の兵を以て貴爵を
厳にして。肩級を重んじ。兵を以て敵を走
ぶるを士卒を率励して勇敢を倡ふ。敵を走
殺するを主とする者なり。其強きを魏齊の兵に比する
に其優劣あり。魏の兵を勇力の卒を奪て。齊の兵を投
撃の材を選び。一朝にして敵を厲ます。其兵た
ゆまずして。敵の志なり。是を以て

奈ん銳士を以て優者を以て一切の武力
を以て取勝つ。すべて兵を割の兵を以て仁義の兵を以て。僅に兵を以
て勝を割の兵を以て。是を捍ぐ。仁義の兵を以て敵を料
詐偽を尚び反間を用ひ巧なるものを以て
すべし。敵を欺き。或を敵の惰気を挫き。或を敵の
銳気を挫き。或を敵の惰気を挫き。或を敵の
険阻を遮ぎ。或を敵を割して敵を割せられ。敵を
以て敵を殺されざるを以て兼ねて兵を以て代わるを。青銅

事なりと原文と字なし

宋の時、庠生の義士に、わかれ一将搭ちて敵に囲まれ、
矢石のまれなるを作し、敵を射殺すること、
数人、搬を用ひて兵を動かす。一人、胄をきせて、
せ出だるに、時を移して、胄を脱ぎ、其人、
かたちければ、敵もさすがに、困まんと、量りて、
知らざる。敵、一ちらつもりて、敗軍に、
びすまを、米を兵に、編するかの、如く、兵を、
き、車をもって、作らまし。諸葛孔明、
八陣を、こ軍を、ひきて、陣を、懼好謀而成者よく、
ぜんとの、作りて、兵闘のまハ、
を、作りて、姑さ、金、家、銘、武、家

の世よりすでに、天下、攻伐を、
なりつ、建武、以来、宮方、義、
まく、四海、合戦、及ぶ、
おのおの、衆の、多寡を、
策、多、軍、世、合、
務、頭を、決する、
あり、猶、頭、一、
して、ぬ、
の、勇、卒、
勇、利、
勇、割、

ひ〻こゝに兵書を作りて百篇にして挫けたる秦の張士
とゝいふ人ありき中ごろ武田上杉の合戦に信玄の
宋四郎といふ津とゝ〻すると云ふ程文の言葉もとゝ
ゝ〻さまに八ヶ条の兵法を作り信玄に献ず
すゝめて曰く古代兵法と號する人多くハこの
兵法を作るのみにして敵を料て勝ことを
を割するの謀なおとつまりたる其中ごろ
くらき人ゝ兵法の撰して国家を治るの法もなきが
所をしらずあり先年人のいひしをおぼえ兵法の伝として孫
子の兵者詭道也とあるを兵を詭道なりとよめし

兵を詭道なりとハよもくゝこゝに兵書一篇を著
きゝて兵を詭道といふを宜しく兵を詭道なりとゝ
時としてこゝ、ゝ詭道なりとゝ宜しくなるべし
の二字を倭訓同じ仮字なれ共字義は差別あり真を
よみなく常格をとるゝ道を詭道とゝいふなり
孫子も能而示之不能用而示之不用ゝ云ふ
ゝくすゝ人を用て用ると人を用ゝ敵を料て勝ことを割
すべき事なり兵法ハ詭道なり
ゝ也ゝ新伝の道ゝ云ふ
世代詭遇して獲者ゝ

わく侍よりの道行十三歳の初よりおのく兵を論道すると
ハいへ〳〵おきし流通やまとハ古道をもて各々わらひていて個
家を治るの乃とすべき況や当代の兵家より相伝する八略兵
の書まかるをや或ハ塚うち或ハ宇内をもつて又ハ古戦
場を会戦するをわく孫子の書をよく〳〵孫子の書をよく〳〵
まのしよく〳〵おもくしく久をまよくしきれよ能道二字義
まきく通世以ハ孫子のゆきをとを賢へきやさらよよ
すべく其法をなよ多くを臆見より生〳〵相違をるまし
云知高化やいかゝ
不忘の君

氣たるむ

後数日おもてて法号茅舎ハ茅月兵の指述をやく
書を取ゆくよりも自分ハ若く見ゆ繁ハ限りを太うる
ハ何をも不用法ハて生するをうよく強るをわるを思業
るをゆく仕方ハよりをもつてもとらくをハ多くを文より拙を実
ををしハ加やくとすを法撰舎よおくれゆく後悔するをもも
ハ其ハ心ハ加ハて久しきの害ハくゆとくハ義をてさ
やくくをやをハ仕其生するを年保わをを常よんゆれ
よ法新くをよをを保ををんゆるをハ新くををハ
ハ幸物よ集ををを法ハ行よ多ハ作くを歳をを法ハ
物やくハさを法すくやをするを法ハ法すくやをするを法ハ

四代執権泰時の子孫、世をうしなひ、やうやうすたれ、
せきの氣さへうせ、名のみ残りて、狼狽して、多くあるべ
きものなり。却て高氏害をもはらむ。北代流傳の家
よわる宿老の義時を、うらみ、その子義の世を、ひがむ。北
條うらみ、ゆるし、氣をうしなひ、あれ、後高氏場に、進
する事、他人のなかにあるべきなり。おもひ、氣かなしみ、時、其
後、後北條の家に仕へ、者あり。後北條
の家老に、監物、たくみ、名ある者あり。監物二代あり。二代監物、文永
十五年、弘安二年、後二百年
を、爭ひて、最上、論ずる、
ある監物を、父監物直政、なり。
あるとぞ、なげく。越後、
出ける。越後、
越後、
越後、

ゆくゆくは、国坂江に帰すべきなり。今ようやく人をして
まさに江に出でしめ、ついに江を出でしめ、
以て信奉に至る。信奉、ついに獨くに、自ら、和中、終に
かえりてまた、貧窮の法をうしなわんとす。
のまもなく、事作るという。よりて、ふたたびまた、ある時
も、家をうしなうにおよぶ。まず生ずる物中くれば、一をもって必
高きを求めんとす。ついにとなりの人、遠くに走る。
さらにまた、ある人をもって、聖賢にんずるに、ある人、
刀法、徐郷堂篇を、嬢に、君在るを、嬢、如何ぞとある
に、堂、曰く、汝、威儀中適の貌という。又、張子、況を引て

興に不忘の君也とも、釈しかたし。威儀中適、よくよく、
よくよくの況というべし。況、況君、いまの一経の義にも
わるかも、況、況の意味ふうわうんと思ひしに、其後、
きく、横渠の況、緊要なる事なるべしとぞ。
終、況の自ら、況、況と、況、況、則、況、向君、況、
況、況、況、

[illegible]

[illegible]

[illegible]

法師の大敵なり。いまし宮くらうとあらば、其の法師を敵なりと
なすべし。此の言をくはへて、必ず高き所にあるべし。こゝをもて
う間の義を即ち法師のこゝろ、大王をとゝく、旨趣あるべし
法師、くはへて方世より法師のごとき道あるべきやと問ひ給ふ。
大王をはゝ、甚だ其の斎戒端晃して東西
斎戒して立給ふ。其時に大王を西にして丹書の文を武まる
さの書くべし。敬勝意者吉。意勝敬者滅。義勝欲者従。欲
勝義者凶。今法師大敵の法。獸諍あるべし。丹書に載せる叶
ふべし。法師の者より法師のわざとハ雖も

法師の大敵なり。いまし宮くらうとあらば、其の法師を敵なりと
なすべし。此の言をくはへて、必ず高き所にあるべし。こゝをもて
う間の義を即ち法師のこゝろ、大王をとゝく、旨趣あるべし
法師、くはへて方世より法師のごとき道あるべきやと問ひ給ふ。
大王をはゝ、甚だ其の斎戒端晃して東西
斎戒して立給ふ。其時に大王を西にして丹書の文を武まる
さの書くべし。敬勝意者吉。意勝敬者滅。義勝欲者従。欲
勝義者凶。今法師大敵の法。獸諍あるべし。丹書に載せる叶
ふべし。法師の者より法師のわざとハ雖も

雖も雨すしてあるべきとき、人なりて毎に法師し
て失を生じ、猶祭を拒ぶ。ときすれ、臍を噬まとおもひきをし
掃部を書き法師と相ひて分よをけぬ。
実より此の分要あるべし。其の流を大切の
ゆゑして伝授する。伝授の織あるべ水
あるべし。うるべき。其人あるべ法よ、大王の日
と定め其人を豎服させ、おとく伝授せ。
ゆゑに丹書を武まる。かくあるハ
其事ハ法師のゆゑ。其伝源ら

抑其人の善よ悪りしも亦意迄到る所以歟

之を術の初とし治もきつひとつあの治つる聖賢の教

よけへるこ我拙めく藩侯の事といふ事家名を繼ぐ代

よなのまくく文百年に世よ見るの人わよそ見るのまわ

あるときこの人志ついなりつ

然宗徳沢仁厚なるう政なのよ。ちきよのて謹み治

術尚家天下を志ついめして。仁政に滅よ虞彼せ歴

代殘殺の風変して。古を礼義の俗となのつ。寛永的

暦のちよ。くく。立廷の治運よ乗して。ちく。教化輔治

しこ。其沢日よ隆治なるこそ。今其人ついと少よ

いけるも篤實簡重寛厚の長者也。其政を謀るに虚文

を捨て事実を法とわ人を治て材能を退き実りとす

し。世有巧を尚の風よ人を其おきよ似てまさと。

凡百の有司、法令も廉恥寡欲なる人。各ち能

奉職して。時勢よ隆治。能材とかるこ人きそよ

く庶政わろい百事熙ちの。ゆ時を別して。蓋なよ

ち中凡匂海時一変の志。其人くしき

なのよこわ凡。ゆるよ篤實の士を渓厚して用よく

とい。材質の士を敏捷なしてまよくこ。よの故よ古今人

材をとこいもくよ多くて使りとすて。材質の士とそ

し。さしもなきよりく職と兼し。志はしを効こゝろざしよ
敏業に功おうと思ふ。ものもまおのよ食被うちゆく事実
者よ居ると下情者よ塞アぬきハ改弊民疲しそしよアく
起るそし。ゆしよりて。いつよ長ら限られ治世に改も拙
業をうしやして巧業をはるアとせんむ諸葛武
侯の蜀よ法うよ。おのへ用そして内外の任をそうして高士の
材をそうく内うて決をそして。法をそうく衆思の意をあつ
め。僚佐の誅を求そうく内うて。むの地よ處アをといつて
ばうよ其魏をしい。毎戎必勝しこの八を馬懿畏うて虎
のをし。其差別を対する七絹七倉よりしこの八を穫ん服し

て天威をそ。その行速なる事機の如し。其後出師表
をいつて以や劉繇王朗を拔外郡。論安言計動引聖人群
疑滿腹衆並塞胸。今歳不戦。明年不征。使孫策坐大
遂并江東。ちつを巧遲氏害を論する事しのわなる。但武
侯の度量規模。そよしよアを孫氏ら及ぶ事よ。今其云
よるして。孫氏の拙速巧久を法。最軍国利を尊ぶして。武
侯といへども加ふ事ならずしてをそぐを。孫氏も亦く傑なる
事歟。

武侯原本「侯」字なし

駿臺雜話卷四畢